

第一部 前哨

1-1-1

マンションの二階にある志方家の食卓には午前五時だというのに皿器が並んでいた。

志方和美（シカタ・カズミ）が娘である有希（ユウキ）の名を呼ぶのはもう二度目である。

この春から朝はいつもこんな風にドタバタしていた。

「ほら有希、そろそろ食べないと間に合わないわよ」
台所で盛りつけていた野菜和えを有希の味噌汁の前に置いた和美は、Tシャツにスウェットの上着を羽織り、ジーンズを履いた姿で、彼女もまた起床してすぐであるようにノーメイクの顔を窓からの朝日に輝かせている。直線的で清潔なボブ・ヘアの毛先をおとがいまで伸ばした瓜実顔——五十路間近の年齢であるはずなのに、それが少しも衰えて見えないのは、感情が豊かに映る印象的な二重の双眸と、意思を強く感じる鼻筋の先の、ムチムチと立体的な鼻頭のせいである。去年退職したばかりの元教師という真実より、ベテランのキャビンアテンダント

だと嘘の紹介したほうが納得する人間は多いにちがいない。すっきりとしたボディラインもその心象をつよくさせた。きっと年齢的に消耗しきれない脂肪分は、二の腕に少しと、あとウエストラインにもう少し、つけているだけなのだろう。

「ゆうちゃん、いい加減にしなさいよ」

娘の好みどおり、甘めに仕上げた卵焼きを配膳し終わると、和美は有希の部屋の扉をノックするのだった。

「——おはよう、また寝坊しちゃったよ——」

なんとかブラウスとスラックスという『仕事服』に着替えていた有希だが、前髪を垂らしたままの櫛を通していない黒髪が無造作に肩まで落ちていたし、母親譲りのせっかくの目鼻立ちも寝起きのままに薄くボケていた。娘のほうが、やや切れ長で切れ上がった目を持っている。有希もまた三年前から都内のR高校に国語科の教師として赴任している。

現役の女教師なのだ。

慌てて洗面所に駆けこんだ彼女は最低限の洗顔を済ませ、髪をポニーテールに束ねると、倒れこむように食卓へ戻ってきた。

味噌汁を啜り、卵かけ御飯をかきこむ娘の姿に和美は輝くような若さを感じないわけにはいかない。

メイクもスキンケアもほとんどお手盛りを決めこんでいるはずなのに、そのうえ最近の超過と呼んでいい激務の

影響もないわけがなかりうに、素肌の美しさは高校生の頃と少しも遜色がなかった。多少の日焼けは見られるとしても、キメの細かさと張りは健康そのものである。すべてを二十代半ばという若さが吸収しているのだった。

「・・・昨日の夜回り、何か問題あった？」

自分も椅子に座り、箸をうごかしながら和美が尋ねた。

「——いや、ないよ」

有希は朝刊に目を通したまま素っ気なく答える。

「ヤンキーの兄ちゃんに『ババア、可愛がってやるぜ』って言われたくらいだから平和なもんです」

(やれやれ——)

母親は目尻に苦笑の皺を寄せて肩をすくめた。

我が娘はしかし動じている風ではない。

彼女は去年の後期から生活指導の仕事に回され、週に三日は夜十時まで学区内にある盛り場をパトロールしていた。むろん常識的には、有希のようにクラス担任をもっている女性教諭には稀にしか声がかからないはずの——自校生徒による不純異性交遊、徘徊、暴力行為への被害や加害の監視と補導という——心身の緊張が伴う任務である。

加えて新学期からは陸上部の顧問にまで『抜擢』されている。

生徒の指導は外部から招聘する形で学校OBがあたるから、陸上競技など門外漢の有希でも問題ないのだが、グ

ラウンドを使った早朝練習には教員が同伴する内規があり、春の大会前のこの時期、連日この時間の出勤となるのだった。

「ずいぶん見初められたものよね、有希先生——」
からかうように言う母親に娘は舌打ちする。

「あのツラ校長、今に見てるってもんよ」
記事を読む視線はそのままに、頭のほうを『指し箸』しながら有希は呟いた。

「え？ カツラなの、あの人？」

「生徒たちはみんなそう噂してるからそうなんじゃないの」

思いだすのも不快とばかりにニシン漬けにかじりつく。有希先生がここまで『見初められた』のは、若手、独身、有能、という表向きに説明されているもっともな理由の他にもあった。今の校長——現職時代の和美とも面識がある——と馬が合わず目をつけられているのである。CPCP運動に参加しているのが主な理由で、現代教育界の潮流に泡立つ恫嚇的部分へ、批判的懐疑的言行をたびたび取るものだから、見せしめのように狙い撃ちにされているのだろう。

CPCPとは（Corporal Punishment is Crime Problem; 体罰は犯罪問題だ）の略だが、体罰廃絶を唱える教職員や文化人を中心とした全国にネットワークを持つ市民運動のことだ。ちなみに和美も教職を辞するま

でCPCPの主要メンバーだったという経緯がある。

とにかく——ツラなの本当に？——体制派のあの校長は
伶俐狡猾の最たる人種であった。任免権を握っている上
司になびかぬ教員はいつでもどこでも少数派に留まって
しまう。そんな職場で信念を貫くのは困難であり苦闘で
あるのだが、校長の陰湿な攻勢にも「喧嘩上等よ！」と
怯まずすべてを受け入れ、全力でこなしている娘——身
びいきではなく褒めてやりたいと思う気持ちで一杯であ
る。

・・・胡瓜の漬け物を音を立てて噛みつぶしながら、有
希は長い腕と細い指で箸を操作する和美へ視線をすべら
せた。

同業の大先輩の母親は学校内部のそうしたドロドロの断
面について分かりすぎるほど分かっている。彼女のほう
が自分よりもずっとそういう経験をしてきたのだ。何と
いったって、働く女親の姿——理想を見失わず妥協せず
に教育に立ち向かう姿——を子供なりに感じて育ったの
が、同じ進路を選択した大きな理由だった。

「お母さんの現役バリバリだった頃も——」と有希はふ
と尋ねてみた。「——やっぱりあったのよね、上からの
圧力？」

「それは当然よ」

大きな瞳をこちらに見せて答えた。

「でも今とは状況がちがうし単純に比較するわけにはい

かないわね。まあ私の場合は、周りに仲間も多かったから、有希のほうがずっと大変そうに見えるよ」

それから母は手の動きを休め、どこか遠くのほうを見つめる空気感を漂わせた。

いけない、と有希は内心で自分を叱りつけた。

もちろん母親が見ているのは、昨年他界したこれも教員であった有希の父、秀彦の姿であるに決まっている。誰に言わせても二人は相思相愛だった。一緒に闘った仲間を中心に父がいたと聞いている。だからこそ死の病に伏した父への看病が彼女に退職を決意させたのだ。臨終直後の悲痛な落ちこみぶりはどれほど母が父を大きく思っていたかの証であり、娘でも声をかけられないほどだった。最近ようやく知り合いが開いている小さな学習塾の手伝いをしたり、町内会に携わったりと、回復の兆しがあったので、つい油断して父の記憶に繋がる話題を振ってしまったのである。

「——陸上部のOBね。あいつもアナクロな奴でさ、アレじゃ生徒が可愛そうだって」

慌てて話題を変える有希。

雲の形をなぞるような瞳をしていた和美が我に返ってきた。

「ふーん？ 親・体罰派？」

「どうやらね——」有希の鼻面がキリキリとする感じ。

「——私の前ではまだやらないけど。どうも裏で

は・・・なので——」と味噌汁を最後まで啜りあげると立ちあがった。「——私が遅刻するわけにはいかないんだな。練習時間の最初から監視していないとね」有希が歯磨きを終わると、和美も腰を上げる。

「頑張っ。体罰を止めるのは最初が肝心よ。いったん認めるとタガを嵌められなくなる」

「大ベテランの貴重なお言葉、肝に銘じておきます」敬礼する有希。弱音よりファイティングポーズが似合う理想の若手教師だ。

「でも無理は禁物。何でも一人でやろうとしちゃ駄目よ。私の伝手もあるんだからさ」

バタバタとスリッパの音を立てて玄関へ向う母娘。娘はグレーのジャケットに華奢な腕を通す。白ブラウスの胸の影が濃淡をくりかえした。

「——それはそうと有希、アレはどうなったの」和美が尋ねた。

「アレ・・・って？」

まったく心当たりがないように有希は靴に爪先を入れつつ母親の目を見つめた。

「電話の・・・アレよ・・・」

急に質問の意味がわかって、年齢相応の明るい声で笑いだした。

「キムタケからの電話？ 馬鹿だよアイツ——」

ひと月前より、有希に若い男から電話がかかってくるよ

うになったのだ。最初の電話を和美が受けたのだが、有希の出身中学を知っていたし、クラスまで言い当てたので、てっきり同窓生だと思いこんだ。そのとき有希は不在だったから後日またかけ直すようにと言うと、男は『おかあさん！』といかにも軽い声で叫んで、一方的に喋りだしはじめた。

キムラ・タケジロウ——

男はそう名乗った。

中学時代、有希のことが好きだったが告白できず、いったんは諦めたが忘れられず、意を決して電話したのだと切々と訴えるのである。軽薄な口は達者で和美になかなか話す暇を与えない。しきりに彼女の携帯の番号を聞きだそうともする。もちろん和美は巻きこまれずに何も話さなかったが、ようやく受話器を置いたときは一方的にパンチを浴びせられたボクサーのように疲労感を覚えたものである。

有希の帰宅を待って事実を告げると、あっさりキムタケの嘘がバレた。

記憶によれば少なくとも同じクラスにはそういう名前の男子はいなかった。卒業アルバムで調べても同学年にすら心当たりの人間は見つからない。

ようするに『無差別のナンパ』であろうと結論を下した。どこからか卒業者名簿を手に入れ、女子に電話をかけまくり、手応えがあれば強引に口説いてモノにしよう

というのである。昔からあるナンパ術だが、かなり横着で、かなりレベルの低いやり方かもしれない。以来、母娘の間では男のことを『キムタケ』と呼んで失笑のネタにしていた。

ただしキムタケはしつこく、なかなか諦めずに電話をしてくるのだった。在宅時間の長い和美が受けとる場合がほとんどで、さすがにウンザリしてしまう日もある。

今日はとっちめてやろうと思い、クラスにそんな名前の人間はいなかったと娘が言っていたわと指摘すれば、学年にいましたよと答え、学年にもいなかったと突っこむと、おかあさんは正しい、おっしゃるとおりです、有希さんの母親だから当然だがやはりインテリジェンスの高い方だ、正確には同じ学年ではなくディファレントの学年でした、一年先輩なんです、とかえって誠実に告白するようなムードを演じる。

それも嘘なんですよ、とカマをかけても、一向に悪びれず、今手元にある僕の卒業アルバムをお見せしたいですよ、それならお疑いも晴れるでしょうに、でもインポートなのはケアレスミスではなく、おかあさん、わかりますか、僕は肝心なところになるとからっきし口下手なのでうまく言えないんだけど、インポートなのは僕の有希さんを想うマインドなんじゃないかと、ねえ、おかあさん、そうでしょう——と、どんな効果を狙っているのか知らないが、盛んに帰国子女風の発音の英単語

を混ぜこぜながら開き直ってくる。

嘘や矛盾を追及をされるとそれに輪をかけた妄言をチャラチャラまくしたてるのだ。ベテラン教師だった和美をも辟易とさせる話術——これがもし即興であるなら一種の才能と認めても良いくらいだが、おそらくマニュアルが用意されていてトレーニングを積んでいるにちがいはなかった。ナンパ師というより詐欺師に近いのでは、と疑いも沸いてくる。

和美は反対したのだが、有希はこれ以上、母に不快な想いをさせるのは忍びないと思っただけで、先週、キムタケに携帯のナンバーを教えていた。

居間の据え置き電話にはそれから一件もかかってこなくなかった。つまり有希の携帯が鳴り続けていることになる。

母親はそれを心配しているのだった。

娘はジャケットの肩にバッグのストラップをしょった。

「気にしなくていいって。お母さん、私は一日中、キムタケの何倍も胡散臭い男たちと渡り合っているんだから、あんなのにどうこうされるわけないよ。ただ、今すぐ完全に突き放しちゃうとまたお母さんのほうに掛けてくるかもしれないので、適当に電話に出てあしらっているとこね。頃合いを見てバシッと言ってやるわ。志方先生はあんたみたいなチャラ男は眼中にありません、てね」

有希は笑うと目のなくなる愛くるしい表情を徐々に母に見せ、澆刺とした姿で職場へ向って駆けだしていった。

・・・そんな彼女がこの日から二ヶ月もたたずに『家出』をしたのである。

1-2-2

志方家が住む地域は、マンションやアパートが軒を連ねる居住地区と、古くからの町工場や商店街が混在した下町の雰囲気を残してもいたが、それでも夜の盛り場などは発展しておらず、至って穏やかな歴史を営んできていた。

それが最近、駅前地区を中心に再開発の計画が浮上し、住民を二分する騒ぎとなっていた。

和美が理事を務める町内会の区域では、人の流れの変化をあてこんだ遊興施設の建設が取沙汰されておりキナ臭さは一層である。施設はパチンコ店や飲屋街といったものが中心で、それだけなら目をそばだてるほどではないのだが、デベロッパーの一つに暴力団との関係を噂される企業が入っているとの情報もあり、ならば最悪、性産業の進出もあるのではないかと、色めき立っているわけである。

連日のように対策会議や勉強会が開かれ、和美も中心メンバーとして忙しく立ち働いていた。

今夜も市会議員に出席を求め、会議が遅くまで開かれていた。残念ながら和美らの要請に応じて足を運んでくれたのは、柴山圭（シバヤマ・ケイ）という女性市議一人だけだった。じつは市長や市議会のレベルではほぼ再開発賛成で固まっており、彼女のような少数の市民派議員だけが異を唱えているという情勢なのである。

それでも政治家が一人でも参加してくれれば運動にも弾みがつく。

「いえいえまだまだ希望はありますよ」

ひな壇の席に座った細身の女性が言った。軽くウエーブのかかった黒髪が紺色のジャケットの肩に届いている。同色のズボンに包まれた下半身を無機質な折り畳み椅子に乗せ、膝を揃えた二肢を上品に傾けている。

「エンタープライズ悠善と卯高組（ウダカグミ）の関係がはっきりすれば、再開発計画に打撃なのはたしかですから」

関西弁のイントネーションが若干感じられる口調である。

エンタープライズ悠善とは例の疑惑のデベロッパーのこと。市議会ミニ会派ではあるものの、様々な妨害にもめげず、こうした疑惑を暴いたのは彼女の功績だった。

「卯高組・・・」

誰かが有名な暴力団のその名を怖れとともに口にする。たしか九州で暴力団追放運動をやっていた代表が狙撃されたというあの事件は卯高組でしたよねえ、と囁き声が聴こえてくる。ヒソヒソ話は市議の発言の最中も途切れない。

——そこまでいかなくとも脅迫電話や頼んでもいない寿司が大量に送りつけられるみたいな嫌がらせは普通なんじゃないですか。

——夜道は人通りの多いところを選んで歩くようにしてますよ。

——うちは娘がいるもんだから家内が怖がっちゃって取りなすのにひと苦労です。

——ペットも用心したほうがいいですよ、狙われやすいからです。

——可哀想なのは代表の佐藤さんですよ、ブルっちゃってこの頃は会の仕事をほとんど志方さんに押しつけているっていうじゃありませんか。

——まあ女性のほうが暴力団にとってはやりにくいでしょうから、大目に見てやらないと。

——それにしても志方さんはやり手ですな。市会議員を担いだしたのも彼女の尽力でしょう。佐藤さんじゃこうはいかないし。

——でも、あの柴山って議員はどうなの？ 警察の腐敗を追及するなんて大見得切って当選したけど、今回のよ

うに暴力団絡みじゃ警察の協力も仰がないとどうしようもないのに、かえって逆効果なんじゃないですか？

——あんなに美人なのに、いまいちマスコミの扱いが低調なのは、そっちのスジが影響しているとかいう・・・
渾名がタイガー・圭って・・・別れた旦那の身元も政治絡みらしいとかさ。

——美人といや志方さんもでしょ。最初に彼女の年齢を聞いたときは耳を疑いましたよ。あと胸に詰め物をする『常識』さえわきまえてくれば、この会の出席率、まだまだ増えるんだけど。

——いっそ代表を彼女にやってもらいますか。ひな壇の中央に居てもらったほうが目の保養もしやすし。

——ま、とにかく商店街の鼻先にハイパーモールみたいなのができれば、ウチラとしては首縊るしかないんだから、せいぜい反対運動していきましょう。なーに怖いことはぜーんぶ女闘士さんたちが引き受けてくれますって。

・・・和美の耳にも会を開くたびにこうした本音とも冗談ともつかぬ声が聴こえてくるようになった。議員や自分に対するセクハラ一歩手前の猥談など妥協してもかまわれないが、やや気がかりなのは運動の勢いが以前ほどではなくなっているという印象のほうだった。どこの住民運動も一枚岩ではありえない。この地域特有の雑多な構

成も影響して、それぞれ立場のちがう者が参加しているのだから尚更である。卯高組の名が漏れてきたのをきっかけに表向きには盛りあがったが、しだいに事の深刻さに気がつき始め、小さな動揺を来しているといったところだろうか。モザイク状の団結は失速するとあっという間にバラバラになる性質を持つので恐かった。

その辺りを含めて、和美はCPCP運動を通じて知己でもあった柴山圭に少しでも彼らの不安を和らげるよう、発言を依頼したのだった。

圭は今の段階で卯高組本体が何らかの行動を仕掛けてくるというのは考えにくいと説明した。彼らはまだエンタープライズ悠善との関係を隠しおうせると判断しており、尻尾をつかまれるような動きは控えるだろう。こちらとしてはその隙に一般住民が納得できるような明白な証拠を握り、一気に反撃する作戦でいくのがいいと思われる。だからそれまでは卯高組をちよくせつ指弾するのではなく、再開発計画そのものを批判したほうがいいだろう。

彼女の親しみの持てる語り口は自信に満ちており、対応策にも説得力があったので、会は久しぶりに前向きな雰囲気を取り戻したように見えた。

拍手とガンバローの声が威勢良く上がって、夜遅くに無事終了した。

圭と今後のスケジュールについての簡単な打ち合わせを

した後、彼女を送りだし、それから大急ぎで会場の後片付けを済ませ、ようやく帰宅したのが夜半零時を過ぎた頃であった。

照明がついていなかったなので、てっきり有希は先に寝てしまったのだと思った。彼女は相変わらずハードワークを続けており、自分もこの調子である。話す時間はおろか顔をあわせる暇も少なくなっていた。

和美は忍び足でリビングに向い、照明をつけた。

シャワーを浴びてから床につこうとしたが、そういえば玄関に有希の靴がないのに気づく。そしてリビングテーブルの上に置かれている見慣れぬ白い便箋が目に入った。

短い文章が書かれている。署名以外、ワープロの文字である。

お母さんへ。

アパートの部屋を借りてそちらに住むことにしました。

忙しくて急になってしまいご免なさい。

詳しくは後で連絡します。

有希より。

まさに青天の霹靂で和美は疲れを忘れるほど驚いてしまう。

有希の部屋を覗きに行くのも小走りになるほどだ。

空っぽの六畳間――。

本棚やベッドを含めて家具は一つもなく、ゴミ箱すら運びだされている。

若手教師の暮らしていた痕跡は何一つ残っていなかった。

その空虚感に圧倒されてしばらく立ち呆けてしまった。なんとかリビングへ戻り、置き手紙を読み返してみた。署名は有希の筆跡だと思うが、こんなに短い文章をわざわざワープロで打つのは少し不思議だろうか。いや彼女はパソコンを普通に使いこなす現代の若者だからそういうものかもしれない。転居先をなぜ書かなかったのか？ 慌ただしく引っ越さねばならなかったのではなかったのだろうか？

母親は娘の携帯に電話してみた。

半分予想できたことだが、電源が切られており繋がらなかった。

受話器をもどすとテーブルに両肘をつき、ゲームの次の一手でも考えるように、組んだ指に顎をのせた。

・・・冷静になれば、それほどおかしな話ではないのかもしれない。

有希も成長した社会人である。独立は時間の問題だった。二三年前からそうなってもおかしくはなかったが、父親の発病と他界があったので先延ばしになっていただけとも言える。自分も不在になって一人残されてしまう

母の孤独を案じたのだろう。じゅうぶん時間が経ち、母も社会活動に復帰できるまでになった。もう出て行っても支障はあるまいと、決断したのかもしれない。

時期についてはそうした理由がすぐに思いつく。とくに非常識な点はなかった。

しかしやり方は・・・？

これではまるで家出、もしくは夜逃げではないか。

顔を合わせる機会が少なくなったとはいえ、ゼロではなかったのだから、予定を話すチャンスは幾らでもあったはずだった。

そこはどう考えても不自然である。

和美はここ数日の有希に関する少ない記憶をできうる限り思いだそうとする。

たしかに表情が——あの娘にしては——暗かったのかもしれない。真剣な雰囲気であったのはその通りである。だがそれは仕事上の困難な課題を克服しようとするときの大人の顔つきと思うほうが自然だろう。

いつもと格段の変化はなかったはずだ。

何か別の特殊な事情が絡んでいるのだろうか。

詮索されると困る理由——駆け落ち？

彼氏でもできたのか。

和美は苦笑しつつ首を振る。健康的な有希はこれまでも何人か男友達と付き合っていた。そのさいは親へ紹介してくれていたはず。こそこそする性格ではなかった。教

師となってからは恋愛の時間もないほど働いていたわけだし。

不倫？

ますます縁遠い話である。有希の気性からして、女性が負い目を持つようなそうしたスタイルを選択するとは思えない。

翌朝になっても有希から連絡はなかった。携帯も繋がらないままである。

学校へ直接、電話をしてみれば声を聞けるはずだが、ためらわれた。娘を信用していないようだし、学校側へ彼女のプライバシーが漏れることになるのは彼女の立場にとって不利益をもたらす危険性もある。

有希の自由意志を信じよう——和美は再開発反対運動に進んで身を置き、不安を掻き消すことにした。

しかし音信不通が一週間も続けば、さすがに我慢の限界である。

携帯電話が通じないのはどうしたっておかしな話ではないか。

まず学校へ電話を試みる。

出たのは男性教師であった。

志方有希の家族であると告げると、急に声に緊張感が生じたようだった。

こちらが質問する前に、少々お待ちくださいといって保

留音に切り替わってしまう。

五分も待たされたらどうか。

昼休みを狙って掛けたから、すぐに有希が出てもおかしくないかと踏んでいたが、とうぜん昼休みであっても多忙な教師は多忙であるのを元教師の和美は知っている。それでも娘の安否を気づかう母親としては苛々するほど長い時間となった。

保留音が止んで聴こえてきたのは有希の声ではなかった。

「——お待たせしました、校長の大村でございます」
妙に静かで落ち着いた調子の声。

またなぜ校長が直々に・・・？

心の内の動揺を抑えながら、自己紹介する和美。

「志方先生のお母様——ということは志方和美先生ですね。お久しぶりです」

「昨年退職しましたので、元教員ということですが・・・」

「そうでしたそうでした、志方先生からもそう聞いていましたよ。貴方のような優秀な先生が定年を待たずにお辞めになられるとは、惜しいの一言でした」

大村の皮肉な物言いに和美は片方の柳眉を持ちあげた。この男とは面識があったが、同じ学校に籍を置いていたわけではなく、何らかの会合で顔を合わせた程度のものであった。彼は管理職側のメンバーの一人として、和美は

教員グループの女性教諭代表として、会に参加していた。ジロジロと見られたのは覚えているが言葉を交わすこともなかったはず。時と場合によっては尖鋭的に対立する関係だったのだから評価してくれていたとも思えない。

「・・・娘がいつもお世話になっております。校長先生もお元気なようで何よりです」

こちらもやや皮肉をこめて言ってやった。

「いやいやもう歳ですから、若い教師の諸君らに付いていくのが精一杯ですよ。とくに志方先生には教えられることが多くて多くて。きっと優秀なのはお母様の血筋なんでしょうなあ——」

そこで大村は非常におかしそうに笑い声をあげた。

何ともいけ好かない男である。

芳佳の匂う眉から頬にかけてが冷え冷えとしてくる。

有希の天敵上司はようやくこう続けた。

「——それで今日はどうされましたか？」

「娘の志方有希に家族として急用がございまして、お電話させて頂いたのですが、何の間違いか、校長先生に繋がってしまったようです」

「そうでしたか急用でしたか・・・どんな種類の急用で？」

「え？ えーと・・・娘は出勤しているのですよね？」

「ああ、じつはですね、有希先生は——と呼んでいいで

すかね。姓だけだとお母様と混同してわかりづらい——
今、陸上部の顧問として合宿所のほうへ入って頂いている
のですよ。土日含めて五日間ですがね」

目標の全国大会は夏休みにあるのだが、都道府県予選は
この時期にある。それに備える仕上げとして合宿を打つ
のが恒例だという。陸上部は優秀な成績を残した過去も
あり、授業を休むといった特例を校長の許可により認め
ているのだった。

「まあ有希先生はクラス担任も引き受けて頂いているの
で、二三日といえども学校を離れては欲しくないのです
が——」

「それも校長先生のご用命ですのね」

大村の嫌がらせの一つだろうと想像した和美は陰のある
言い方をしてやる。

「ン？ うーんイヤイヤ、和美先生——まあまあ退職さ
れたとはいえ私のイメージの中ではこう呼んだほうがし
っくりいくので——和美先生は誤解しておられるようだ
が、今回の件は有希先生のほうから是非にとお手を挙げ
られたのでしてね。自分は部のコーチである中西先生
——在野の方なんです、うちのOBなんですよ——彼
の情熱的な教育哲学と他に類を見ない指導理念に敬服し
ており、今後の教員生活の糧にするためにも、寝食を共
にする合宿という場でぜひ薫陶を賜りたいと、お目を学
生のように輝かせてですね、おっしゃるわけです。ま

あ、そこまで心酔しておられるなら、汲んであげましようということで許可を出した次第ですよ」

和美は唇を噛んだ。

中西某？ 有希が心酔するなど有り得ないウルトラ体育会系だろう。

大村の話が本当だとすると、有希が内偵を進めていた体罰問題が理由になったのかもしれない。事実の確証をつかんだとすれば、たとえ数日であっても、外部から隔離された合宿所生活に生徒だけを送るのは、責任感の強い有希にとっては忍びなかったのだろう。自分から付き添いを要求したのは暴力の深刻さの現れにちがいない。

「——なにしろ中西コーチというのは独立不羈のヒトカドならぬ人物ですからな。有希先生も当初はいつものプロテスターぶりで接していたようですが、時がたつにつれ誤解が晴れて、熱烈な信奉者に転向されましてね。

我々も彼女のような有望な若手にあのように慕わりたいものだと言々話すまでになりましたよ」

そこでまた意味不明の低い笑い。

転向？

あの有希が？

それは絶対にフィクションだと和美は即断する。中西某との蜜月ぶりを見せかけることにより、合宿へ同行するアリバイを手に入れようとしたに決まっている。

不在の理由はわかった。しかし携帯は？

「・・・その合宿所ですが、住所はどちらですか。携帯が繋がらなくて困っているのです」

「まさか。そんなに山奥のはずはありませんよ。私のところには毎日、有希先生から報告の電話がきていますし」

「でも実家には・・・」

「それはですね、きっと——」と大村は合点したように言った。「生徒は合宿中、トレーニングに集中するというので、携帯をコーチ預かりとしているのです。律儀な有希先生だから、彼女もそれに倣っているのではありませんか。見あげたお心がけです。さしづめ生徒目線の教師というところでしょうか」

民間人が教師の携帯も預かる？ 無用の越権行為のような気がするが・・・。

「合宿所へちよくせつ電話をしたいので番号を教えてください」

「関係者以外に学校関連施設のプライバシーを公開するのは防犯上の理由から厳しく制限されておりまして、それは和美先生もご承知のことと思います。必要であれば、今すぐ私のほうから実家へ連絡するよう有希先生に電話を入れますので」

学校侵入事件が多発した影響だ。和美も退職まではその方針を支持していた。大村の意地悪とまでは言いがたい。それに急用と言っても有希が無事であるなら完全に

家庭の問題でしかないわけだから、無理に要求を押し続ける大義名分もない。

「・・・では待っておりますのでよろしく願います・・・」

「和美先生もお一人になられたそうで大変だが、早くベターハーフをお見つけになって温かい家庭を育んでいかれるのがいいでしょう。有希先生については私も親代わりになり見守っていくつもりですからご心配には及びません。今後はどんな些細なことでもご相談に乗ります。いつでもご連絡ください」

「——っ」

電話はそこで切れたが、何ともいえない不快感が胸に残った。恩着せがましい言葉の端々に、一方的な女性像と家庭観の押しつけが感じられた。有希がこの男の人格に反発するのも無理からぬところと思う。『胡散臭い男』と称したのは言い過ぎではなかった。

(たしかにこの校長に比べれば、キムタケ君なんか可愛いものだわ)

和美は舌打ちしながら有希からの連絡を待つことにした。

1-3-3

結論から先に言えば、その日、有希からの電話はかかってこなかった。

いやその日ばかりではない。次の日も、その明くる日も志方家の電話は鳴らなかったのだ。

もう誰にも頼れないと、和美は結論する。

大村校長に再度電話をするのが筋だろうが、とにかく有希にちょくせつ会えればすべては解決できるのだから、そうすればいいのである。

下校時に学校の正門で待ち伏せする。

部活が挟まれたってかまわない。

何時間でもそこに居続ければ、やがて有希も出てくるだろう。

高校では一学期の終業式が迫っており、夏休みに入ってしまうとますますスケジュールが読みにくくなる。

いっそう立てこんできた再開発反対運動の合間を縫って、ようやく時間の都合を付けた。

有希がマンションを出て行ってから半月近く経過していた。

その日、和美は午後になってマンションを出た。

本音をいえば登校時から待ち伏せたかった。合宿は終わっており、つまり再び早朝練習に入っているとすれば、部活顧問の出勤時間は、マンションにいた頃と同じとなるはずである。

しかし今回は諦めた。R高校は最寄り駅から徒歩十五分程度の閑静な住宅地に位置している。朝の時刻では人通りはほとんどなく、勤め人に見られるような衣装を選んだとしても、駅とは逆方向へ歩くのだし、朝帰りのような感じになってしまい、違和感で浮きまくるはず。それで学校の周辺をウロウロしては、不審者として通報されるのは時間の問題と断言していい。学校周辺が警察のパトロール重点エリアであるのは元教師でなくとも知っているところである。

他に良い方法も思いつかないし、下校時でも遭遇するのは容易であろうと、学校のスケジュールに詳しい和美は楽観的に考えたのだった。

——今日も酷暑の一日で七月の太陽が容赦なく街を灼いている。

胸を広く開けた半袖のワンピースは、紫地に白のストライプの入った柄で彼女のプロポーションにも合い、涼しげであったし、麻の素材なので通気性も良かったが、発汗を止める手立てにはなってくれそうもない。ただしそのために用いる日傘とハンカチは、人相を人目から遮る道具としても重宝しそうである。

校舎が視界に入ってきた。

学び舎なりの独特の佇まいが感じられ、教師としての郷愁をくすぐられる気分である。

校門の近くに小川の流れる児童公園があり、涼を求める

子供連れの主婦など、かなりの人通りがあったので、学校に出入りする人間や車両を観察する怪しい中年女を日常の景色の中に埋めこんでくれるのだった。

商店街の外れにあった自動販売機などにも行き来しつつ、授業の終了時間を待つ。

陽は傾いてきても気温は一向に下がらないし、湿度はかえって上がったように感じるくらいだ。

ようやく下校のチャイムが聴こえてくる。

それが鳴り終わらぬ前に、数人の男子生徒が全力疾走で校門から飛びだしてきて駅のほうへ走り去っていった。

どこも同じだわと和美はおかしく思った。必ずそういう生徒がいるのである。特急の帰宅部だ。

彼らの後、十分も経過すると多くの生徒たちが雑踏とともに下校し始めた。

夏期仕様の制服を着た彼ら——男女共学校の華やかさが満開だ。

少人数でグループを作っている者、一人で黙々と歩く者、他人の鞆をもたされている者、忘れ物をとりに戻る者、髪をとかしながら笑っている者、携帯電話を開きつつ他人にぶつかりながら前に進む者・・・

懐かしい下校風景に和美は胸が詰まる想いを味わった。もっと教師を続けていても良かったかもと、ふと甘酸っぱい寂寥の気持ち去来する。

だがそんな感傷に浸ってばかりはいられなかった。

おおかたの生徒たちが四つ辻の東西南北へ見えなくなっていく頃、教員たちも帰宅の途についてくる。

担任をもたず、部活や生徒会にも携わっていない一握りのベテランなどは、ほらもう校門をくぐってスタスタと家路についていく。

もちろん有希は最も遅い帰宅のグループに属しているはずだった。担任同士の打ち合わせもあるし、部活にも付き合うだろう。陸上部は朝練に加えて通常の課外活動の時間帯にも練習をしているらしい。生活指導の仕事がある時にはこのまま居残るのが普通かもしれなかった。

しかしそれらはすべて可能性が高いというだけであって、100%を保証するものではない。何かの拍子に——他の教師と日程を交換するとか——平凡な時間にポツカリ帰宅する場合もあるだろう。和美がグラウンドのほうへ足を運んでみないのはそれがあるせいだった。グラウンドを金網越しに覗くのは不審すぎるし、ここに留まって目を凝らしているほうが確率は高いと考えている。

——和美は思わず回れ右をして校門へ背を向けた。

大村校長とおぼしき人物が出てきた。

同年輩の男性教師と談笑しながら連れ立って歩いている。

中肉中背で眼鏡をかけた風貌は以前と変わらないようだ。

和美にはまったく気づいていない。駅のほうへ闊歩していく。やがて見えなくなった。

肩をすくめながら日傘を折り畳んだ。もう顔を遮る役割も終了とみなして構わないだろう。R高校では和美の顔を知る関係者は彼だけだろうから、とりあえず警戒心を一段階低くしてもいい。

薄暗くなりつつある景色の中、バッグにしまい入れた。

(しまった。カツラかどうか確かめるのを忘れたわね)心の余裕も出てきて、和美はふくらみのある唇をほんの少しほころばす。

さらに小一時間が経過して教師たちの帰宅も疎らになったが、有希はまだ現れなかった。

駅からの務め帰りの人波が始まった。

街灯が点きだした。

どうやら部活の最後まで辛抱強く待たねばならないらしい。

完全に太陽が沈めば、屋外の運動部の練習も当然終わりである。

スポーツ刈りの男子生徒や、ボーイッシュな髪型の女子生徒が集団を形成して下校していった。彼らはユニホーム姿であったりジャージ姿であったり、中には制服に戻っていたりと、様々な服装である。

しかしそれらの運動部員たちの流れがもう出尽くしたように途切れた後、早足で校門をくぐってきた一人の女性

の姿を見て、和美は一瞬言葉を呑みこんだのだった。

(有希——)

それは黄昏の目にも間違うものではない我が娘本人であったが、彼女の出で立ちは不可解と言ってよかった。

少なくとも教員の衣装ではない。

額に締めた鉢巻きと両手首のリストバンドの包帯のような明るさがすぐ目についた。

ああこれは・・・と和美は咄嗟に思いつく。

陸上の選手が身につけるユニホームではないか。それも短距離ランナー用のセパレートタイプだ。

少しでも空気抵抗を稼ぐために、肌に密着するよう設計されたランニングウエアのトップとボトム——R高の校章と同色であるエビ茶色をして、有希の胸と臀部に貼りついている。

もちろん首から鎖骨を含む胸もとや、ストラップしか食いこんでいない両肩から両腕にかけて、下半身は両太腿からスニーカーまでの全部の肌が露出している。(ただしゼッケンがバストのあたりからぶら下がる形で取り付けられているので、辛うじて臍窩と腹部は遮られていたが・・・)

それは、激しい練習に明け暮れ、生理を犠牲にするまで体脂肪を筋肉に変えた女子選手こそが、トラックに立つために着てだけ、ようやく違和感を覚えない種類の特殊な薄衣なのである。

駅前の繁華街へ通じる住宅地の一般道をこれで歩くのは・・・しかも有希の体格は豊満とはいえないものの成人女性の標準にはあるから、例えば双臀の厚みや腿肉の太さに生地の狭小な構成が対応しきれず、鼠蹊部の部分が想定以上に切れこんでしまっている。少し内股で歩こうとする努力が見られるのはそのせいだろう。そんな仕草の上に、しきりに視線をさまよわすものだから、まるで何かに怯えているように映る有希——。ひときわ明るい街灯の下に来たとき、和美は彼女のあらわになっている肌のほとんどがきつめに日焼けしているのに気づいたし、そのきわどいユニホームにひらひらと付いているゼッケンの数字も読めた。同時に鉢巻きにも真紅の文字が染め抜かれているのがわかる。ゼッケンには『100』という赤数字。鉢巻きのほうはどうやら『研修中』とあるようだった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

1-4-4

だが学校は夏休みに入ってしまった。

期待していたネットワークもこの時期を迎えると休業状態になってしまう。

そのほとんどが学校関係者なのだから致し方ない。

今のところ和美の元にもたらされた情報といえば、例のコーチのフルネームと略歴くらいであった。

中西益雄（ナカニシ・マスオ） 54歳

R高校卒業後、G体育大学入学。米国やロシア、韓国への留学経験あり。専攻はスポーツ心理学。自身が選手となっていたのはレスリングやサンボといった格闘技が中心で、なぜか陸上競技ではない。教員の資格は持っているようだが、特定の学校に勤めていた形跡は見当たらない。少なくとも公立の学校には奉職していないだろうという。どこかの教育塾か、あるいは民間企業に所属していた可能性が高い。

R高校のガードが固くそれ以上の調査は進んでいない。

ネットワークのこうした内偵行為は、察知すれば学校として敬遠するのは当然であったが、この高校の場合、やや神経質がすぎる印象も受ける。

志方有希先生に関しては箝口令が敷かれているように、誰もが口を閉ざしてしまう。中西コーチについても同様に鉄のカーテンが周囲に張り巡らされているようなのだ。

有希に不利益が降り掛かっては逆効果になるので、内偵も、あまり派手にならないでくれと和美が釘を刺しているものだから、強行に動くわけにもいかず、膠着状態に陥っている間に夏休みを迎えたわけだった。

やむを得ないところである。

学校という組織はその気になるとハリモグラのように身を固めて周囲を寄せつかせない術をもっているものである。

学校サイドの調査が手詰まりとなって、和美はもう一方のサイド——金髪の青年の側——からのアプローチを開始する。

とはいえ興信所などには伝手どころか知識もなく、ネット検索から試してみるしかなかった。

志方家ではパソコンもインターネットも有希の担当で、和美は初心者に近かったが、見よう見まねの経験はある。

——この世にいったい幾つあるのだと目を疑うほど、興信所の数は多かった。業務内容もほとんど変わらないようだし、どこに差を求めて選べばいいのかわからない。最初は途方に暮れるしかなかった和美だが、何日かやっているうちに意外なところからこちらの要求に合致する会社に行き当たった。

市議会議員柴山圭のホームページのリンク集に載っていたNPO法人の女性人権団体が、ドメスティックバイオレ

ンスに関する会合を開催したという報告を、自サイトに掲載していたのだ。活動家や医師、弁護士などの基調講演やディスカッションが行われたわけだが、その中にひとつ、ユニークな企画が組まれていた。

『DVからの効果的な離脱法』というのがそれである。夫、恋人、或は家族から暴力を受けた場合、具体的にどうやって身を守り、身を隠すか、方法を解説していた。講演者は『興信所所長』とある。

何枚か写真もあった。

それほど年配とも思えない——三十代半ばだろうか——スーツ姿の女性が登壇し、OHPを使って喋っている姿。

トンボ眼鏡に近い大きな黒ぶち眼鏡をかけている。

モモエ探偵社代表 児島桃枝（コジマ・モモエ）

プロフィールにはそう書かれていた。講演の内容を読むと技術的実地的な話が平易な言葉で語られているようだった。

さっそくモモエ探偵社のサイトへ行ってみる。

それによると規模は小さいが、二十数年前から業務を続けている老舗で、児島桃枝は代表権を父親から引き継いだ二代目にあたるらしい。社名はその時に変更されている。女性の名を用いることで、暗い興信所のイメージを

払う効果を期待した。そういう例はこの業界では稀に見られるようだった。

社名変更以降、従来どおりの業務と並び、ストーカー対策やDV問題を得意としているとある。時代の趨勢だろうが、女性所長としての目配りも感じられる。

時間ばかり浪費するわけにいかないし、兎島桃枝に好感を抱いたこともあって、和美はここに相談すると決めた。

柴山圭に連絡をとると、その女性人権団体はむろん旧知であるが、興信所のほうには面識がないと言った。ただし団体に手配をしてそちらから和美を紹介してもらうのは、何ら問題なしと請け合ってくれた。

圭は和美より年下であるが、さすがに大人であり、詳しい事情を説明せよとは求めなかった。

「どうもこの所、嫌がらせが多くてね」と議員の日常活動へ話題を変えてくれる。

「事務所への無言電話や脅迫電話は昔からやけど、自宅にまでかけてこようとする輩が増えてるのよ」

和美のような気心のしれた相手には関西弁がちょくちょく顔を出してくる。東京は大学かららしい。

「え？ まさか卯高組関係？」

「うーん、たぶん別口だとは思うけど・・・用心に越したことはないわ。志方さんも注意したほうがいい」

「私なんか下っ端だから大丈夫だけど、会長の佐藤さん

には言っておきますよ」

「佐藤のおっちゃんには言わないほうがいいんじゃない。これ以上、縮みあがったら消えてなくなってしまうわ」

きついジョークはそこまでとなり、追って紹介の日時などを連絡すると約束してくれた。

友人の配慮に、有希との距離が少し短くなったような気がして、ここ数週間の曇りがちな心に日差しが入ったようだった。

さらに好転は続いた。

R高校の生徒が電話をしてきたのである。

女子で、名前を山室沙耶香（ヤマムロ・サヤカ）という。

なんと陸上部に所属していたらしい。

彼女は志方有希先生の実家に、顧問の様子を尋ねるため連絡を入れてきたのだった。

娘はここにはおらずアパートを借りて一人暮らしをしているらしい、と和美が説明すると、山室沙耶香は非常に驚いた様子だった。

ネットワークを使っても、ようとして判明しなかった学校内での有希の情報が、向こうから飛びこんできたのである。しかも陸上部の子であるのだから、かなり詳しく事情に通じているはず。受話器を握りしめる和美の手に力がこもった。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

1-5-5

その日の夜、訪問者を告げるマンションのドアチャイムが鳴った。

和美が居間のソファに座り、ぼんやりと一之瀬佑香から、いや中西益雄から突きつけられた誓約書を眺めていたときだ。

振り返って壁時計を見る。

午後七時五十分——

来客の予定はない。

ひよっとすると——和美はぐんと立ちあがった——有希かもしれない。

親の情とはそういうものだ。元教師の聡明さも、住民運動を支える使命感も、その感情に優先するなどありえなかった。

素早く壁のモニター付きインターホンに向う。

スイッチを点灯させると、カラー画像が浮かびあがる。

残念ながらそこに有希の姿は映らなかった。

体格のいい背広姿の男と、これもスーツを身に着けた女の二人が立っている。

両方とも見ず知らずの人間である。

「どちらさまでしょうか」

「夜分恐れ入ります。警察のほうから来ました——」
頭髪が額奥へ後退しかかった男性が言い、背広の胸ポケットから黒革の認識章を抜きだすと、広げ、カメラに瞬時、さらした。短髪で刈り上げが目を引く中年女性も同様に手帳を持ちあげている。

「——最近、この地域で頻発している下着の窃盗事件につき、聞きこみ調査を実施しております。ご協力頂ければ幸いです——」

その事件については噂を耳にしている。関連しているかどうかはわからないが、数週間前、志方家のバルコニーに干していた洗濯物の一部が紛失したという経緯もある。乾燥機がたまたま故障した日だったが、数点の紛失物の中には、たしかに自分と有希の下着が含まれてはいた。ただ、人為的に持ち去られたのか、何かの拍子に落下したもののなのかはわからなかったので、警察には届けなかったが——。

「おもに女性単独世帯を狙った卑劣な犯行でありまして、放置しておく大きな犯罪に結びつく危険性もあります。注意喚起をかねた防犯パトロールの意味もごさいます。お手間はとらせませんので幾つか質問にお答え願

えませんか」

もうこんな時間でもあり身体も疲れていた。それにこれからモモ工探偵社に山室沙耶香の一件を報告し、相談する仕事も残っている。

「えーと・・・」

和美が渋っていると判断したのか、男性は女性からファイルを受けとり記載事項を指で追っている。

「こちらには二十代の女性はお住まいでしょうか」

「・・・ええ、まあ・・・」

「じつは容疑者の遺留品と思われる下着が何点か押収されておりまして、その中に二十代女性が履いていたバケ学的な痕跡のあるパンツがありましてですね、そこが実際の持ち主と照合されますと、物的証拠として効力を持つという因果関係がございまして、確認作業を急いでいるという流れになっておるんですよ」

玄関前の通路で、何やら著しくプライベートな話をされるのは面倒なものである。それに町内会の理事であり、公職にいた身だ。女性の敵に対する捜査活動を黙過するのは柄ではなかった。

和美は自宅着であるノースリーブの青ワンピースの上から夏物の白カーディガンを羽織り、玄関の扉を開けに行く。

捜査官とおぼしき二人はさすがに腰が低く、居間へ案内する和美に何度も恐縮の言葉を口にした。

ソファに腰を落ち着けた彼らはさっそく志方家の家族構成について尋ね、現在、有希が不在である事実を確認する。

「失礼ですが、お嬢様のご職業は？」

「教員をしております」

和美のその答えになぜか顔を見合わせる二人。

玉置と名乗った男性が説明した。

「性犯罪者はよく強い属性というものを持っておりまして、たとえばバストが大きくなければ駄目だとか、スレンダーでなければ駄目だとか、それはもう正常者からみれば滑稽なほど、細分化された嗜好、こだわりというものがあるんですね。この容疑者の場合、どうやら対象が高学歴であり、キャリアを認められる働く女性に限定される傾向なのでございます」

つまり教師である有希は、標的として狙われるハイリスク・グループなのだった。

もうこうなれば隠す必要もないので、和美は数週間前の紛失事件の存在を明らかにした。

「するとお母様の下着も？ 専業主婦でしたか？ えっ、元教員で？ なるほど。やはり我々のプロファイリングの精度は高い。ねえ外原君——」

満足げな玉置はそういう名であるらしい女性とともに、手柄のように自画自賛した後、警察への被害届を見合わせた和美の判断をやんわりと説諭し、市民の義務につい

て朗々と講義した。

被害者はこちらなのにと、和美はやや白けてしまう。

「・・・しかし洗濯物をバルコニーに干したのは乾燥装置が壊れたからで、その日一日のことです。計画的に盗んだと言えるのかしら」

「たしかにそういう疑問をお持ちになるのは自然です。検分してみましよう。バルコニーのどこに、どのように干されたのか、ご案内ください——」

和美の同意を得る前に二人は立ちあがり、とくに外原は勝手にバルコニーに面した窓のカーテンを開け放つのである。

「・・・っ」

例えばこれがかつての有希だったら、活発に抗議しているところだろうが、不惑をずいぶん前に乗り越した都雅な母親は黒目勝ちの瞳をほんの少し見開くだけで、冷静に対応する。

バルコニーへ出た二人はその隅から隅までを検証した。マンションの外の環境も観察し、一般道路との位置関係を吟味する。

「あそこに脚立を置き、あの排気口に足をかけられさえすれば、難なくここへ登って来られますぞ。二階だからといって油断しましたね、ね、お母様」

玉置は和美の肩を気安く叩いた。

さらに指摘は続く。

「——ここにこう物干用のハンガーを？ それじゃ通りから丸見えじゃないですか。変態性欲者を挑発しているようなもんでしょうな、いや、結果的にですよ結果的に」

「・・・下着は影に隠れるように他の物を外側にくるように吊るしましたが・・・」

「それは無意味です。けっきょく目立ちますから。頭隠して尻隠さず——ですねお母さん！」

この男は何故そんなに嬉しそうなのだろうと和美はいぶかる。

頭隠して尻隠さず？

正確にはその諺は悪事を隠そうとして隠し切れていない様を喩えている。被害者に用いるのは不謹慎なのだ。ただの無知なのか、嫌味なのか。

「下着というのは正確にはどういう種類のものですか。まず娘さんのほうから」
外原が無表情で質問してくる。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

1-6-6

モモエ探偵社が用意したワゴン車に乗り、途中から合流した児島桃枝とともに、和美は金髪男が入り浸っているらしい某パチンコ店へ急行した。

運転は男性調査員で、他にも一名の部下が所長を補佐している。

桃枝からの助言もあって、今日の和美の服装は決めこんでいる。

学校の式典で着ていたスーツ。

スカートから出たふたつの膝頭がストッキングに包まれて女性的だ。

化粧も久々に手抜きなく描いているため、CA並みの華然とした目鼻立ちが復活していた。

「こちらの真剣さを相手に伝えなければなりません。威嚇とまでは行かなくとも会話にイニシアティブをとる必要があります。身なりは心理的な駆け引きとして重要です」

そういう桃枝も、いつもよりいっそう堅い印象が前面に出ている。変装と呼んでいた黒縁眼鏡もかけていた。

「そうそう、彼の名前はわかりましたか。偽名でも知っていないと声をかけ辛いわ」

「ええ何とか調べあげました。過去には『西園寺太一』『木戸広志』『大隈義純』なども使っていたようですが、今回はこれです」

桃枝はメモを手渡した。

「『木村武次郎』——キムラ・タケジロウ。維新の偉人のような仰々しい名が好みのおようです。見た目とのギャップをセックスアピールの一つに考えているのかもしれませんが。詐欺師にはありがちなスキルで・・・おや、どうしました？」

和美のこわばった表情が桃枝の注意に止まる。

キムタケ——？！

和美は内心叫んでいた。まさか、あの電話ナンパの彼だということか。

しかし偶然にしてはできすぎた一致である。

歯牙にもかけない、あまりに泡沫の出来事だったので忘れていたし、女所長の耳にも入れていなかった。

もし同じ人間であったらどうなるのだろうか。

和美は手短にこの一件について説明した。

桃枝は腕組みをして長嘆息する。

「とうぜん同一人物とみなすべきでしょう。最初から有希さんを狙っていたか、不特定多数を物色中に彼女に行き当たったのか、それはわかりませんが・・・」

「だけど伝説の人物にしては、ずいぶん幼稚な方法じゃないかしら。話術はたしかに達人だったけれど、脇の甘い印象しかありませんでしたよ」

「しかし少なくともお母様もお嬢さんも、まったく警戒心を持たなかったわけですね」

たしかにそれはその通り。警戒心どころか、庭に迷いこんできたブサ可愛い野良猫ほどに会話のツマにしていた時期もある。

「彼らにとっては、きっかけなど何だって構わないのかもしれませんが。いや逆に、教員や、そういうインテリの女性に対しては、幼稚な方法こそ近づきやすいというノウハウでも持っているのかもしれない。近づいてしまえば、あとは何とでも、と」

有希がキムタケに籠絡された・・・和美は首を振る。信じられないことだが、眼前で起こっている事象を並べればそうになってしまう。自分の考えている以上に世間の闇とは底知れぬものなのだろうか。

「問題は、キムラがお母様を認識しているという事実——それが、今回どう転ぶか、です」

悪い方向には進まないのではないかと桃枝はさっそく予想した。

「かえって奸智を弄して母親までも言いくるめてしまおうと企むのではないか。肉親を懐柔してしまえば、有希さんの孤立は絶対ですからね。こちらとして最も避けたい門前払いのリスクが減るのなら、しめたものです」

この作戦の最大の肝である時間稼ぎがしやすくなるというわけだ。

「ただしお母様の負担は増えるかもしれません。以前、説諭したチンピラに、頭を下げなければならなくなる展

開も考えられます」

「なんの支障もないわ」和美は言下に断定する。「有希の屈辱を思えば、私のプライドなど物の皮よ。土下座してでも、いいえ足にしがみついても、あいつを釘づけにしてやります」

パチンコ店が近づいてきたので、和美がバッグへ忍ばせることになった超小型の集音マイクを最終点検する。サポート側で追跡するための望遠カメラも準備万端だ。計画通り、最初は和美一人でキムラへ接触するが、これらの機器を使ってその動静を逐一監視するので不測の事態にも対応できる。店内には客として調査員も紛れこんでいた。和美はその後、隣接するファミリーレストランへ彼を誘導し、詰問と愁嘆場を芝居する。頃合をみて探偵社所長が踏みこみ、追いこんでいく段取りである。それで、さらに時間を引き延ばせるだろう。スタジアムに派遣されている調査員達とも連絡がとれていた。有希は現在、施設内にいることが確認されている。

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####たずに『音信不通』になったのである。

1-7-7

モモ工探偵社御中

私、志方和美が貴社へ依頼した案件は過日を持って円満解決に至りました。

つきましては継続しているすべての調査を速やかに終了してください。

精算・支払いについては当初の契約通りをお願いします。

貴社の今後の活躍をお祈りしております。

志方和美

以上のような内容証明付き郵便が探偵社のビルに送りつけられてきたのが、あの日から二週間後の昨日である。モモ工探偵社所長、児島桃枝が、志方和美からの依頼に関わって約ひと月あまり。

難しい案件に格闘する毎日に呆気なく終止符が打たれたわけだ。

桃枝が声を失ったのも当然だった。

一週間前の経過報告でも、R高校陸上部の活動に不定期で顔を出すことが判明した娘、有希の現況について分析や感想を伝え、今後の方針を語り合ったばかりではない

か。

そうなのだ。

志方有希はやはり高校教員の職を捨ててはいなかった。以前ほどではないにせよ、顔を出した日には部活動の最初から最後まで立ち会っているようである。ただし内偵を警戒して、もう駐車場等の公共部分で一人になることはなかった。キムラ・タケジロウの派手な送迎もなく、公道のジョギングもしない。尾行を巻くように一人で登校し、一人で下校する。

だから現時点では新しい居住先も調査できていなかったが、和美はそれについて悲観せずに前向きに捉えていた。とくに有希が元気に姿を現したことを喜び、夏休みが終わり新しい学期が始まれば、もっとチャンスが広がるはずだと期待を口にした。

依然として公営ギャンブルの施設にも場末の遊技場にも姿を現さないキムラの行方とともに、引き続き、探偵社のこれまで通りの仕事を希望すると、固い信頼を何度も表明していたのである。

その和美がこちらに相談もなく、手の平を返したように調査打ち切り通告とは・・・。

そういえば、三日前の報告の電話には呼出音が続くだけで応答がなかった。

この時期、定期的なそれは二三日ごとと決めており、和美はいつも、はやる感情を抑える感じで電話に応じてき

た。

彼女が住民運動に参加し、多忙をきわめていると説明を受けていた桃枝は、自宅の電話はもとより、携帯にもつながらない状況も、一度だけならそれほど異変だとは認識していなかった。

しかしこうなってしまうえば、この空白も謎めいて浮かびあがってこよう。

郵便の筆跡が和美のものかどうか、精密に鑑定している暇はなかったが、探偵社で保管している依頼書等に残っていた彼女の直筆と比較して、大きな差があるようには思われなかった。

すると調査打ち切り通告は法的に有効ということになってしまう。

探偵業もビジネスだ。

クライアントの正式な決定を無視してタダ働きするわけにはいかない。

桃枝は唇を噛みながら文面を読み返す。

『案件は過日を持って円満解決に至りました』

たしかにそう書いてあるが、二週間前のあの志方有希の姿からして、これほどの短期間で解決できるとは到底想像できないだろう。百歩譲ってそうだったとすると、志方和美はキムラ・タケジロウに会った公算が高くなる。有希の心身を著しく拘束しているあのスケコマシと交渉せずに彼女を奪回できるはずもない。

自分の忠告にあれほど賛同していた和美なのだが・・・。

桃枝は首を横に振った。

『円満に』などとても無理だ。

探偵歴十数年の経験と想像力では、何らかの不当な介入なくして、志方和美の豹変を説明できない。

とりあえず桃枝は、所長の職権でこの案件の終了を先送りし、和美との接触と聴取を試みることにした。

今日、彼女自ら志方家へ向ったのである。

この章の残りは有料本編でお読みください。

#####

1-8-8

夏に催される高校陸上の全国競技会は閉幕していたが、この時期、陸上の大会は毎週のようにある。市民大会から秋の国体予選、実業団や大学を交えた国内戦、アジアジュニアなど国際戦の予選等、目白押しである。

R高校陸上部も、実力上位者を中心に選手を出場させ、ぼつぼつ入賞者をだす活躍を見せていた。

他にも、腕試し程度の意味で参加したり、応援やサポー

トに回ったり、あるいは選手としてではなく大会役員の補佐という裏方になったり、それぞれの技量に応じて部員達は活発に活動しているのであった。

本日、児島桃枝が二人目の対象者として予定している一之瀬佑香は、大会の裏方としてあの——しばしばR高が優先使用する——スタジアムに赴いているはずである。彼女のスケジュールは、ほぼ漏れなく彼女の個人ブログに掲載されることがわかっていた。

ネット時代の探偵は地道に足で稼ぐ情報ばかりではもはや追いつかない。ネット上の案件も多々持ちこまれるようになってきている。サイバー戦力は欠かせない探偵社の売りとなっているわけだ。

ブログの発見とチェックくらいなら、他の仕事に忙殺されている所長の日々であっても出来ない相談ではない。

『佑香の愉快的なアスリート女子な生活』

というのがブログのタイトル。

ほぼ一年前より開始されていた。

更新率は頻繁のほうだろう。

最低でも一週間に一件の記事がアップされている。多い時になるとアイドルのイベント並みに数時間おきの更新ということもある。とくに春夏冬の休み期間は倍加されるようだ。

内容は他愛のないスイーツレポであるとかお洒落レポであるとか、平均的な女子高生目線の話が多いが、部活動や大会の様子等も報告されていて、タイトルに適った作りにはなっていた。

残念ながら顧問である志方有希先生への言及はいっさいなく、もちろん志方和美の名も、それを示唆する一行もない。

彼女が絶対的な崇拜を表明する中西益雄コーチの記述も抑え気味だったが、トップページのサイドバーには彼の著作『忠誠の金メダル』が紹介されており、自費出版本販売サイトへ誘導するようにリンクが張られているくらいだから、やはり心酔ぶりをうかがわせてはいた。

それを除けば、単に女子高生の私的な生活だけを切り取って世間へ提出している印象である。

プロフィールの頁にはユニホームを着た後ろ姿の写真は掲載されていたが、顔写真はなかった。ネット空間の過剰な性欲の餌食にされては困る、一般高校女子のブログでは普通の対応といえる。

コメントやトラックバックの受け付け拒否設定も同じ理由からのはず。

それでもアクセス数は相当な量だった。

R高校陸上部の公式サイト化しているからかもしれないが、一日数百件を越える訪問者数は高い数字であろう。現役高校女子アスリートは世間を惹きつける『バッジ』

なのかもしれなかった。

もっとも一之瀬佑香の競技選手としての実力は文才やWeb運営能力に比べると芳しいものではないようだった。

走り幅跳びや三種競技などが彼女の専門種目だが、試合の半数以上で予選落ちの結果となっている。最低レベルではないものの一流には程遠いランク。

ちょうどブログでも始めたくなる成績なのかもしれない。

そんな彼女だから、今回の大会は裏方へ配置されているわけである。

『オフシャルもケッコウ面白いよ。ためになるし。最後にジュースももらえるしwwww』

昨夜の更新ではそう書いている。大会の宣伝のためと称し、詳しいスケジュールを忘れずに入れてもいた。

私はだいたいこの辺で、おじさん役員にお茶をついで回っているでしょうと簡単な地図まで貼りつけている。

何事も陸上人気上昇のためというのが口癖で、こうした小さな努力がその前提なのだと強調した。

和美から聞かされている一之瀬佑香の不良的な横顔とはまるっきり反対の優等生ぶりが滲んでいる。

ちなみに、志方和美のマンションで桃枝が三人組と遭遇

したあの日、ブログは更新されている。

家族や友人とすき焼きパーティをしたと綴られた記事。

更新時間は夜の十一時。

すべてを性善説で考えれば、とうていマンションへ押し入る物理的余裕はない。

しかしコンピュータの世界ではこの程度の偽装偽造はいともたやすい仕事である。

ところで一之瀬佑香の父親が陸上部後援会の会長であるという事実も、このブログで発覚したものである。

トップページのサイドバーにわざわざ後援会の紹介文がリンクされている。

『歩亀の会』

これが会の名称。ウサギとカメのイソップ童話から採用されたらしい。陸上とは逆説にみえるが、努力の継続と傲慢への諫めが本意である。

OBや在校生の父兄が中心ではあるものの、会員になるにはR高校に直接縁がなくとも、陸上ファンであるとか高校陸上部を応援してみたいとか、そういう希望があれば部外者であれ、ちっとも構わないから気軽に声をかけて欲しいという、一之瀬末広氏の文章が載っていた。佑香は彼を父親ですと紹介していた。兄の存在も記事の中にちよくちよく登場してくる。愚兄の母校もR高校なのだとあっけらかんに公開している。

ずいぶん簡単に情報が手に入ってくるのもネット時代の

特徴。しかしこれらは裏の取れた情報とはやはりちがう。あくまで準採用にとどまるそれなのだ。探偵社所長は肝に銘じて怠りなかったが、×寸前の本案件では一個一個、疑念を潰していく作業には時間を割けないので、どうしてもこうしたものに頼らざるを得ないという話である。

桃枝は柴山事務所から回した車を高速道路に走らせ、当該会場へ向った。

昨今のスタジアムは米国ボウルゲーム開催級である。巨大な夜間照明設備も東西南北に四塔、敷設されている。関係車両の合間に車を停める。

志方有希を捕捉した駐車場とは位置がちがう。

さて、一之瀬佑香の顔を探さねばならない。

マンションでの彼女が佑香本人であったとすれば、桃枝も目撃したことになるのだが、夜に遠目で眺めただけの記憶で果たして照合できるかどうか・・・困難であるなら他の方法も検討しなければならない。

五輪では花形競技である陸上も、日常的には野球やサッカーに比較してどうしても地味な注目度である。

学生中心のこの地方競技会もご多分に漏れず、客より選手・役員の数の方が遥かに多かった。

スタジアム周辺は競技前競技後の柔軟運動をする選手達でごった返し、湿布や膏薬、それに若々しい大量の汗の

匂いが漂う中、三十路の女探偵は正門ゲートを目指す。選手のほとんどはユニホームかジャージ姿である。そしてチケット切りやパンフレットを渡す仕事をしている高校生は制服、白ブラウスで腕に腕章を巻いているようだった。

つまりこの姿格好にだけ注目すればいいということになる。

人気の少ないスタジアムの客席に入り、持参した双眼鏡でトラック周辺を探す。

記録の係や、競技のための道具の搬出入などで、予想以上に多くの裏方がいるのに驚いた。

控え室区域にもいるだろう。これはなかなか大変な探偵業務になるかもしれない。

しかし突破口は意外なところから現れてくれた。

一之瀬佑香をまず発見したのではない。

砲丸投げのフィールドヘレンズを向けた時、桃枝は声を上げそうになった。

数人の選手——肉太巨体の持ち主——達のうちの一人に見覚えがあったのだ。

三人組にいた、坊主頭の若者がユニホームを着てしきりに投擲のフォームを調整していたのである。

そのニキビの多い顔は明らかに彼だった。

彼の順番を促すコールによれば『R高校 スギシタ・テッペイ君』がその名であった。

パンフレットに記載のある種目別の参加選手リストにはたしかに『杉下鉄平』とある。

そして決勝の投擲が終了し——彼は決勝進出者で最下位——ぞろぞろと控え室に戻ろうとする選手達を先導する仕事の女子生徒へ、最大の倍率で焦点を当てた時、桃枝の眉はひきしまった。

ショートヘアに小麦色の肌、鍛えられたスリムな身体

あの暗がりには街灯の下で視認した女子本人にまちがいはなかった。

彼女が一之瀬佑香であるのはほぼ確定的だろう。投擲選手全体をフィールドからトラックへ誘導し、スタジアムスタンド直下に半地下のように埋設されている、窓を持つ控え室へ行進していく間、その女子は杉下鉄平と親しげに会話しているのであった。リラックスしたにこやかな二人の表情は、昨日今日偶然遭遇した初対面の若者のそれではない。親友、いや悪友でもあるかのような馴れ馴れしさである。

数段の階段を下りて控え室へ入っていく。

練達の探偵が事前に入手していたスタジアムの見取り図によれば、そこは、奥へ進めばスタジアムの外へ出る通路があり、左右へ進行を変えれば隣あう大会役員の溜まり場の部屋に通じる、ホールの性格を持つ場所なのだ。ガラス窓越しなので人の動きはわかっても、塹壕のよう

な位置関係は桃枝の座るスタンドからの視界をかなり遮ってしまう。

決勝が済めば選手達は帰るばかりとなるのだろう。

学生係員はどうか。

パンフレットで投擲競技のスケジュールを指でたどる。

やはり今の砲丸投げが最後の決勝だった。

彼らのリラックスは競技や仕事の緊張からの解放を意味するものだったのだ。

係員も多少の雑事ののち、やはり帰宅の準備をする流れに変わりはあるまい。

このままここに座っていては取り逃す危険性が出てきたわけだ。

桃枝は立ちあがろうとする。スタジアムの外で一之瀬佑香を待ち伏せしよう。

「あっ——！」

今度は本当に声を発してしまった。

疎らにいた二三人の観客が振り向いたくらいである。

だが、収めようと眼窩から外しかけた双眼鏡がその端に捉えた映像は、声を上げて当然の意味を帯びていた。

桃枝は慌ててスタンドの階段をくだり、飛び降りればアンツーカーのトラックに着地する観客席の際まできて、手すりから身を乗りだして再び双眼鏡を覗いた。

志方和美がいる！

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

1-9-9

指定されたホテルは都内の一等地にある三ツ星クラスだった。

仕事以外ではなかなか足を踏み入れない高級サイトである。

約束した時間の三十分も前にラウンジに来て、エントランスを観察可能な席に座った。

急いているわけではなかったが、できるならこの案件も今日で片がついてほしいと思う。これ以上、所長自ら会社の利益に直結しない労働を続けるわけにいかないのだ。当然、結末が志方母娘の安全と幸福の認証に至れば、それに越したことはないのだが・・・。

あの母娘二人が肩を並べて歩いてくれば、決して見落とすはずがないのに、待ち合わせ時刻を十数分過ぎた現在でもエントランスにそれらしき姿は現れなかった。

珈琲のお替わりを注文しようかと考え始めた時、明るい外光が燦々と入射してくる吹き抜け付近の、自動のガラ

ス扉がゆっくりと開かれた。

しかしドアボーイが丁寧に招き入れたのは二人連れの客ではない。

場違いな学校の夏服姿の少女である。高校生であるのは明らかだった。

桃枝の脳裏にはその娘の名がすぐに浮かんだ。

一之瀬佑香——

偶然の遭遇でないのは彼女の行動から理解できた。

数秒の物色の後、桃枝の顔を見つけるや、真っ直ぐにこちらへ歩いてくる。

力強い歩幅がスポーツ女子のスプリントを物語っている。褐色の肌が連日のトレーニングを宣伝していた。

「探偵さんね」

立ちあがった桃枝を見下して一之瀬佑香はそう言った。

「あなたは？」

短髪の顔がにやりと笑う。

「知っているくせにさ——」

一之瀬は歩いてきたそのままの勢いで桃枝の前の席に腰を下ろし、ショルダーバッグを隣席へ投げ置いた。

「面倒だからここで済ませようよ。あっちの喫茶室のフルパ、いけるんだけどな」

口惜しそうに言いながら、お前も掛けなとばかり対面の席を指さす。

「他の人と待ち合わせ中なんだけれど」

会いたいと思っていた相手が向こうからやってきてくれたことになる。

椅子を引いて身体をいれた桃枝は一之瀬を睨みながら座った。

「ああ、チュウチュウとリンリンね。来ないよ」

「チュウチュウ？ リンリン？」

「だからさっさと済ませようよ。志方母と志方娘のニックネームでしょ。カズミはネズミだからチュウチュウじゃない。有希のほうは——」

一之瀬は『かったるいわ』とばかりに首をぐるぐると回した。

「どうして来ないの」

「チュウチュウの老化現象でね、ダブルブッキングぶっこいちゃったってわけ。今日のスケジュール一杯なのに探偵さんとの約束を挟んじゃったのよね」

「それで今どこ」

「チュウチュウ？ 私しらなあい——」トボける一之瀬。「——どこかのスタジアムで昨日みたいにボランティアでしょうねえ」

「ボランティアって、あれは一体なんなの」
やっぱり見たんだと、一之瀬の瞳が桃枝を責めるように射た。

「盗撮犯として被害届を出すべきか、検討中らしいよ」

「どこのどいつがそんな寝ぼけたことを言っているのか

しら」

そもそもそのつもりなど、まったく予定にないに決まっている。証拠も皆無だし、事情聴取すらする気がなかったのだ。脅せたら儲け物、程度のジャブだろう。

「まあいいけど。じゃ、とりあえず、これ、確認してもらおうから——」

一之瀬はバッグからノートを出し、ページの間に挿していた用紙をテーブルに置いた。

『誓約書』とタイトルが打たれている。
見覚えがある文面だった。

一、私、志方和美は、R高校陸上部コーチ、中西益雄氏に対し、いわれなき嫌疑をかけ、人権侵害に等しいプライバシー調査を決行し、収集した情報を歪曲し、同氏を犯罪者扱いした事を認め、謝罪いたします。今後は前言を払拭する事に努め、同氏の人格を尊重し、業績を尊敬し、実像を啓蒙する事により、同氏の名誉を回復する事を誓います。

一、私、志方和美は、R高校陸上部の名誉を、流言蜚語をもって冒瀆し、信頼を地に落とそうと画策した事を認め、謝罪いたします。今後は同部の活動を良く理解し、活動を応援し、発展に寄与することを誓います。

志方和美

そう。これと同じものを志方和美から見せられ、アドバイスを求められたのだ。

ただ一つ、そのときの内容とちがうのは、文章の最終行に志方和美の直筆のサインがあることだった。

わざわざ人さし指でその部分をつつき、ニンマリと笑う一之瀬の小芝居がなくとも、目の前の用紙には朱肉を押した印鑑までなされている依頼人の名前があり、まざまざと目に飛びこんでくる。

こんなものには相手をするなという桃枝のアドバイスは、なんらかの経緯をたどり覆されるに至ったようである。

「——というわけで心を入れ替えたチュウチュウは、我が陸上部の援助会員となり、時間の許す限り、ボランティアの仕事に精を出しているってわけ」

「後援会の『歩亀の会』ね。あなたのお父さんが会長やってる・・・」

「へえ、つまらないことまでよく調べてるのねえ。きっとブログを閲覧したんだな。さすがは探偵さんだ」

「和美さんはご自宅のマンションへ帰られていないようだけど、現在、どこに住まわれているか、知らないかし

ら」

一之瀬は肩をすくめる。

「家なんか興味ないしい。母娘二人で暮らしているようだけど、こっちも青春で忙しいんだからさ」

「毎日のように部活へ参加されているの」と桃枝は食い下がる。

「リンリンのほうは我が部のアイドル顧問として、これまで通り活躍してもらってますよ。それに——」

一之瀬はノートから写真を数枚、とりだした。

「——チュウチュウのほうも新規会員ということで、このあいだ合同歓迎コンパに招待されてましたよ。現役部員も交えてね。もちろん私もいたけど」

桃枝は写真を一目見て絶句した。

数枚のうちの二枚には胴上げされている志方和美の姿が映っていたからである。

たしかに宴会場のような雰囲気の中、そのステージのスペースで、丸刈りのジャージ軍団に胴上げされている白ワンピース姿の女性こそ彼女にちがいない。長身のスタイルだが、十数名の男子高校生達は軽々と空中へ元女教師を放りだしていた。半袖の肩が乱れてブラジャーの紐が見え、スカート部分が持ちあがって太腿の素肌が露出してしまっている。ワンピースがそこまでラフになるくらいだから、宙に舞った回数は一度や二度では足りないはずだ。激しく荒々しく、天井にぶつか

るまで高く打ち上げられているのだろう。

ふと気づいて、桃枝は探偵七つ道具の入ったバッグから拡大鏡を取りだし、写真を精査し始める。

「ドヒャ——」一之瀬が喜んでいる。「——本当に金田一先生のようなことするんだわ、オッタマゲェ！」

拡大したのは女性の顔だった。黒髪が上下動の反動で横顔を覆い尽くしていたが、引き延ばしてみると、大きく開け放った唇の形がかすかにわかった。つまり和美は大声を上げている形相なのである。おそらく恐怖を訴える悲鳴がその口から迸り出ているのではないか。もちろん大笑いしている時もこういう唇の形にはなる。一之瀬にこの事実を指摘すればそう反論するのだろう。しかし娘が胴上げ洗礼を受けたと知り、拳で机を叩いて憤慨していた和美が、自分もそれと同じ状況になって大ウケするわけもない。

これは暴力なのだ。

二枚目は体育館だった。

和美はフォーマルな衣服を着ていない。

スタジアムで目撃したあの時のユニホーム姿である。

鉢巻きもゼッケンもつけた研修中の『制服』だ。

まるで逆バンジージャンプのように、高々と数メートル、飛びあがっている。腰に巻いたロープの端を地上で誰かが握っていなかったら、危険すぎる高さである。

ヒップだけ遅れ気味に、四肢は背を丸めた身体の前へ投

げだす海老の格好——。

表情はわからない角度だが、知的労働者で、大人で、上品な志方和美の物腰を思えば、あまりの乖離に胸が締めつけられる気分だった。

「・・・シゴキ・・・いやイジメだわ・・・」

「歪曲！歪曲！ 見た目で判断するのはやめてくださいよ。深いふかーい絆があるからこそできる組体操なんだから」

「組体操って何よ」

「他の写真も見てくださーい。都合のいい情報だけ切り取って非難するのはやめてくださーい」

そう言いながら自分は猫の方向転換のようにあっさり視線を手元へ落として携帯電話を打ち始める。外見はスポーツ女子でも中身はまるで今時のギャルである。

・・・たしかに、その他の写真は絆の存在を知らしめていなくもない構図であった。

・ニキビ面の男子部員二人に並ばれて肩を組み、にっこり微笑んでいる和美の正面顔。

(ただし、三人とも例のユニホーム姿なので、絡み合っている四本の腕は異性の素肌同士で密着している。しかも両側の男子の、ニキビと髭が混在する頬は、ぴったりと知的熟女の柔らかな頬に押しつけられ、卵形の輪郭を潰すほどだった)

・複数の陸上部員による集合写真。和美も混じっており、その部分だけがワイプされたものである。リラックスした機会の撮影であるらしく、映っている数人全員が笑顔でVサインなど戯けたポーズと面相を決めている。鉢巻き頭の和美もVサインをその頭上に乗せ、舌をペロリと出して、大きな瞳でウインクを作っていた。

(しかし、数人のうち、和美だけ全身汗びっしょりなのはどうしたわけだろう。ヌメヌメと光った肌はローションを塗りこめたようである。これもまた彼女の周囲にいるのは男子部員ばかりであった。五十路直前の元教師がする表情としては、滑稽なまでに若作りであり安週刊誌のグラビア依然である)

・体育館だろうか。中西益雄コーチが椅子に腰掛けており、その左右に、対象形で彼へ最敬礼している二人のユニ姿の女性がいた。右が和美、左は・・・有希であった。二人の全身からは反発の印象など微塵も感じられず、純粹な尊敬と恭順の精神を素直に表現しているとしか思えない。絆といえはこれもまた絆である。

(とはいえ、中西コーチのほうは彼女らに一瞥もくれない。玉座におましているかのように尊大であり、優越性を誇示しているかの体。ここでもまた有希のバストがユニ・トップの脇からハミ乳化していた。以前、探偵

の証拠ビデオで目撃したときよりも、体型が丸みを帯びたように感じるのは錯覚だろうか。食欲増進による肥満というよりホルモンの活性が促す成熟、女体特有の脂が興っているようなのだ)

この章の残りは有料本編でお読みください。
#####

1-10-10

モモ工探偵社代表、児島桃枝がR高校へ出向き、中西益雄と会見するとした予定の日、柴山圭は早々に議会での仕事を切り上げ、事務所に戻っていた。

彼女からの報告を待つためである。

自分が署名した紹介状を桃枝がどう使うかはわからなかったが、河徳側へ正式に宣戦布告するようなものなのだから、後ろ盾としては城に腰を据えて待機しているべきだろう。

といっても、議長派と市役所の癒着を暴くための資料整理や書類作りなど、他の仕事も山ほどあるのだから、暇を持って余すようなことはない。

世間では公共事業削減による土建業不況が日常化してい

る中、この市においてその傾向がほとんど見られないのは、時代錯誤の箱物行政が依然として幅を利かせているからだった。おかげで市債に依存した予算編成は毎年火の車で、年々市民への皺寄せが酷くなっていく。栄えているのは競争入札制度を支配した一部の土建業者と、談合の奸計を用意して業者側から合法非合法の金銭を懐に入れていた政官の一派だけである。何しろ彼らのドンと呼ぶべき中心人物が、もともと土建会社の社長上がりなのだから、旧き懐かしき利権政治の典型例なのだった。議会内の反対勢力を次々に攻略し配下に収めていった彼らは、自派に都合のいい市条例を制定し、都合の悪い条例を改悪し、己の栄華を恒久のものにしてきたのである。

彼らにとっては『札付き』である柴山圭が当選すると、懐柔作戦は無理と即決したらしく、排除と攻撃を徹底して行ってきた。

議会における彼女の行動は執拗に封じこめられた。発言は妨害され、強制的に無期延期され、許されても他議員のみならず傍聴席に仕込まれた手下達によって激しい野次に晒され、事実上、封殺されてしまうのである。

しかしこうしたあからさまな『空中戦』に——圭が自身のブログを使ってどんどん暴露するものだから——世論がかえって彼女に同情するとみるや、狡猾な彼らは陰湿な『地上戦』へと作戦を変更しもする。

圭が中央の過激政治集団の一員であるという中傷は、最もつこく市民レベルへ流されるデマの一つであったし、先日のようなならず者による『襲撃』も頻発するようになった。

例の迷惑電話もある。それが暗黒勢力の手によるものなのかは、内容の支離滅裂さからして疑いも残るのだが、圭の議員活動をよからぬものとする態度は彼らと同心円上にあるスタンスにはちがいない。

それでも彼らの攻勢が圭の二期目の当選を阻めなかったのは、選挙民にも改革への希求が消えていなかった証拠であるし、議会内から幾つかの不正や愚行の告発がなされたのは、圭の能力の高さの証明でもあったわけだ。この市にも再生の灯火は残存するのである。

電話が鳴りだした。

桃枝からだろう。

気がつけば陽はとっぷりと暮れ、窓の外の古びた景観は街灯の青白い光に染まっている。

——いや、電話器本体の液晶画面を見ると、着信したのは圭の自宅の番号である。

相手は娘の志織だった。

「事務所にかけてくるなんて珍しいじゃない。どうしたの」

高校生の彼女は誰に似たのか独立心が強く、とくにこの頃は親との団欒の時間も切り詰めて、サークル活動などに没頭する青春真っ只中の毎日である。

『さっきねえ、警察の人が来たのよ』

娘の声は動揺しているようではなかったが、かといって機嫌の良いそれでもなかった。

「警察って・・・。何かあったの」

『ほら、この間、ベランダに干してあった私と議員の下着、揃ってなくなったじゃない。あれやっぱり下着泥のせいだったらしいよ』

「志織、お母さんのこと議員なんて呼ぶのはやめなさいね。下着？ ああマンションの下へ落ちた奴でしょう」

『事務所にいるママは議員先生なんだから問題ないでしょ。だから落ちたんではなくて、私が言ったように盗まれたんだって。刑事が来て、ホシのガサから発見したっていう下着を確認してくれっていうのよ』

警察用語を連発する娘を叱るべきか黙認すべきか、迷っている余裕はない。自宅に警察の人間が訪れたというのは理由の如何に関わらず議員としてアドバンテージでは有り得ないのだ。

「下着をもってきたの？ どうしてその下着がうちのだとわかったのかしら」

『実物じゃなくて、実物大の写真よ。ホシがコレクションの目録を作っていたんだって。詳細なデータをよ。私

もう恥ずかしくってしょうがなかったわ』
どうやら容疑者はまだ捕まっておらず、住居のみが摘発されたのらしい。この市を中心とした広範囲に犯行現場が及んでおり、盗んできた下着も三桁にのぼる数だった。目録の作成自体に変態性欲を感じる、そういう癖もあるらしかった。

お転婆の志織が恥ずかしがるのも無理はない。
目録には窃盗した日時場所はもとより、下着の所有者の名前や年齢、身体のサイズまで記録されていたという。

『で、それが本当にその持ち主のものであるのかどうか、一つひとつ特定していかなくちゃならないので、根掘り葉掘り聞かれたってわけよ』

「——っ」

家族の同伴していない未成年者に対し、そんなデリケートな事情聴取をするだろうか、圭は瞬間、疑問に思った。

「刑事さんって男性なんでしょう」

『男もいたけど、女もいて、質問したのは女のほうね』
だとしても、拙速のそしりを免れまい。日を改めて再来すればいいだけの話ではないか。下着泥の捜査にそれほど固執する必然性はない。

『ホシの趣味ってのが特殊でね。ステータスの高い女性しか狙わないんだって。他のガイシャの下着の写真も見せてもらったんだけど、教師とか、弁護士とか、会社の

社長とか、あと新聞記者っていうのもあったかな。つまり今回のホシの狙いはピチピチギャルの志織ンじゃなくて、議員先生の柴山圭さんのほうだったのよ。つまり私はとばっちりを受けただけなの。ムカツク話じゃない、何から何まで——』

議員を狙った『下着テロ』？

世の中、物騒なのか平和なのか、ちっともわからない。

以下は有料本編でお読みください。

#####